

信州大学 教育学部 同窓会報

信州大学教育学部同窓会報

【第25号】

発行人 深澤 弘二

事務局 長野市西長野6ノロ

信州大学教育学部内

TEL・FAX (026)238-4370

同窓であることの喜びを感じて

同窓会会長

深澤 弘二



東日本大震災から早四ヶ月が経過しようとしております。この四月、福島県浪江町から五年生の児童が私共の学校に転校してきました。家、家財道具の全てが津波に流され、原発から僅かな距離にある町でもあったため一時避難を余儀なくされたとのことでした。

児童には、担任の誘導により、津波から逃れるため二十分以上も必死に逃げ回った等、震災時の生々しい話も聞いております。

深雪せる野路に小さき杏の跡

われこそ先に行かましものを 林 宇村

子ども達の命を守ろうと懸命に避難誘導をされた教職員の中にも、尊い命を落とされた方も大勢おられます。人間愛・教育愛に根ざした教職員の思いは一つであることを強く感じます。

自らの命をかけて子ども達の安全に尽くされた皆様に対し、哀悼の意と共に心より敬意を表す次第

ご挨拶

教育学部長

平野 吉直



本学部の現在の教育組織は、平成十一年度の改組以来、十三年目を迎えました。その間、長野県教育界をはじめ、社会の要請に応えることのできる有能な卒業生を輩出してきました。し

です。

さて、同窓会では本年度も教職を目指す学部生への支援、現場教職員の研究助成、教育学部の情報配信等、様々な事業を行っております。信州大学には、全ての学部と同窓会があり、会員のご理解・ご協力を得ながらそれぞれに事業を展開しておりますが、会を通じて同窓であることの喜びを実感し、年一回の総会を心待ちにしている方もおられます。

本同窓会でも、八月に総会を開催し、合わせて会報を送付して会員各位に近況等を報告いたしております。同窓会や教育学部の現状をご理解いただくと共に、教職を目指して共に学び、今あることの喜びを分かち合える会にしたいものと思うところであります。

かし、ここ数年、教育を取り巻く環境が大きく変化するとともに、新たな社会からの要望や組織としての課題も生じてまいりました。国の教育行政の動向においては、教員養成四年プラスαといった制度改革が中央教育審議会で議論され、併せて教員免許法の大規模改訂も検討されています。こうした状況を踏まえ、本学部では平成二十四年度の改組に向け、現在文部科学省と折衝を重ねております。改組の詳細が明確になるのは、本年の九月以降になる見通しですが、今回予定している改組の特色は、次のとおりです。

- 一、義務教育段階を見通した教員養成を目指し、小学校教員一種および中学校教員一種の取得に必要な科目と単位の修得を卒業要件とする。
- 二、学部一年次から四年次までの臨床科目群と教育実習を一元化し、連続的に配置することにより、理論と実践を往還する省察と改善の態度を備えた学校教員の養成を図ること。
- 三、学校教員の養成とともに「スポーツ・野外教育課程」「教育カウンセリング課程」を配置することにより、現在の大きな社会問題であり教育課題である子どもの「健康・体力」「豊かな人間性」を育て、「子どもの心の問題解決」を実現できる専門職の養成を図り、学部として総合的に学校教育を支える人材の養成を図ること。

長野県教育委員会、同窓会をはじめ本学部を応援いただいている関係者の方々のご意見を聞きながら、特色ある新しい信州大学教育学部の構築に向けて調整を進めていますことを、同窓会の皆様にご報告させていただきます。

なお、教育学部がどう変わろうとも、質の高い学校教員をはじめ教育の専門職を育成するという教育学部の使命は変わりません。これまで以上に、数多くの優秀な指導者を養成していく努力を日々怠らな

いようにしたいと考えています。

同窓会員の皆様には、日頃から信州大学教育学部の運営と学生の勉学に対して、多大なご理解とご支援をいただいております。特に、教員採用に向けての模擬試験の実施などに多大なご協力をいただいております。教育学部教職員を代表して、心から感謝申し上げますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願いいたします。



信州大学学長 山沢 清人

三月に発生した東日本大震災という未曾有の大災害と福島第一原発の事故により、長期間にわたって不自由で不安な毎日を経験していらっしゃる皆様に深くお見舞い申し上げますとともに、犠牲になられました方々のご冥福を心からお祈り申し上げます。

信州大学では、お陰様で、構成員や各キャンパスの施設等には直接的な被害を蒙ることなく、当初の予定どおり全キャンパスの卒業式と入学式を行い、全員揃って無事に新年度をスタートすることができました。ひとえに信州大学教育学部同窓会をはじめとする関係者の皆様の多大なるご支援とご協力の賜物であり、改めて感謝申し上げます。

卒業式及び入学式では、若い学生達への期待をこめて、次のようなお話をいたしましたので、一部をご紹介します。

この二年半の間に、世界は三つの大きな波を経験したと言われます。一つは、アメリカの金融機関の経営破綻によって世界中の金融システムが大きな危機に晒されたリーマン・ショックです。二つ目は、情報システムが国の有り様を変えるきっかけとなったアラブ世界の反政府デモです。そして、三つ目が東日本大震災における巨大地震と巨天津波です。震

災によって引き起こされた原発事故は、エネルギーシステムの安全性に警鐘を鳴らし、日本の社会システムが転換点に来ていることを実感させました。

現代の私達の生活を支える社会システムの多くは高度技術化し、大規模化が進み、さらにグローバル化しています。これらシステムの運用は自動化されていますが、不測の事故への対応も含む「システムの保全」には、スキルのある有能な人材が不可欠です。

安全・安心で人に優しい社会システムを構築するためには、旧来の考え方にとらわれない新しい社会システムを作り上げること、すなわち社会システムイノベーションを実行しなければなりません。信州大学の学生達には、そのイノベーションの担い手として、将来、是非活躍してほしいと期待しております。

卒業生は、復興に向けてそれぞれの役割を精一杯果たすと誓って巣立っていきました。新入生は、常に社会に目を向け、自分にできることを模索して努力を続けると決意を述べてくれました。信州大学の学生達は、必ずや日本の未来を切り拓いてくれるはずです。

さて、この大震災では、世界トップレベルの日本の科学技術が自然の猛威に屈する一方で、科学技術とは対極の、長い歴史の経験から生まれた先人達の教訓が災害から人々を守った例も見られました。科学技術には、理工系の知見ばかりでなく、人文・社会科学系の知見も必要であることが認識されたといえるでしょう。これはまさに、信州大学が力を入れている文理融合型の教育研究であり、信州大学の役割が今後ますます重要になるのは間違いないと思います。特に教育学部は、将来を担う子ども達の教育に携わっていることから、一層期待が高まるのは確実です。

信州大学は、総合大学として「知の継承（教育／人材育成）」と新しい知の創造（研究）に注力する社会的な使命を担っております。従来にも増して、信州の「知の森」を強く大きく育てなければならぬ」と決意を新たにいたしました。

教職員をはじめ構成員や関係者の皆様一人ひとり

が、信州大学の役割と将来を考え、行動することによって、必ずや個性輝く大学としてさらに大きく発展し、教育研究をより充実させられると信じております。それが、日本全体、そして世界が真に持続可能な発展を遂げるための貢献につながります。

教育学部同窓会の皆様にも、一層のご理解、ご支援をよろしくお願い申し上げます。



学部の新任・退職教員の紹介

【平成二十二年度～平成二十三年度新任教員】

猪瀬 昌延 先生 (芸術教育講座)

吉田 治人 先生 (芸術教育講座)

神原 浩 先生 (理数科学教育講座)

藤田 育郎 先生 (スポーツ科学教育講座)

高橋 史 先生 (教育科学講座)

高柳 充利 先生 (教育科学講座)

Dalton, Colleen Helene 先生 (全学教育機構)

【平成二十二年度退職教員】

橋本 光明 先生 (芸術教育講座)

平成元年四月一日着任、定年退職

天岩 静子 先生 (教育科学講座)

平成元年十一月一日着任、定年退職

山口 恒夫 先生 (教育科学講座)

昭和五十二年四月一日着任、定年退職

Rebecca Mark 先生 (全学教育機構)

平成二年八月一日着任、退職

第二十三回 同窓会通常総会報告

平成二十二年度の同窓会通常総会は、八月十一日（水）、長野市岡田町の「ホテル信濃路」において、四十二名の出席を得て開催された。

中村直人幹事の進行のもと、太田美恵子副会長の開会宣言、深澤弘二会長の開会挨拶の後、議長団に、郡上典雄、宮下芳一、議事録署名人に、春日一俊、高坂光浩の各氏を選任、書記に安達仁美、宮澤昌道の各氏を任命して議事へと移り、次の三議案について審議された。

● 第一号議案

平成二十一年度事業報告書、歳入・歳出決算及び財産目録の承認について

総会資料に基づき杵渕恭宏事務局長より平成二十一年度事業について、齊藤忠彦幹事より平成二十一年度歳入・歳出決算報告及び財産目録について説明がされた。また、清水厚実、竹松徳門監事より適正に処理されているとの会計監査の結果が報告され、全員一致で承認された。

● 第二号議案

平成二十二年度事業計画書（案）及び歳入・歳出予算（案）の承認について

総会資料に基づき杵渕恭宏事務局長より平成二十二年度事業計画（案）について、齊藤忠彦幹事より平成二十二年度歳入・歳出予算（案）についての説明があり、全員一致でこれを承認した。

〔平成二十二年度事業大綱〕

一、同窓会報（第二十四号）発行、会員、特別会員への郵送

二、研究助成 教育学部留学生後援会基金へ拠出、教育研究に対する補助、学生課外活動への補助



第23回同窓会通常総会 会長挨拶



記念講演会 結城 匡啓氏

三、学部後援 学部・大学院充実に向けての援助、就職活動への支援

四、組織充実 支部組織の強化、地区代表を通して卒業生の会費未納者への納入依頼、退職校長未納者への納入依頼、新任校長・教頭未納者への納入依頼、在学生未納者への納入依頼

五、長期構想 「信州大学同窓会連合会」への協力、総会のあり方・基本財産の運用、個人情報への取り扱い、HPの充実

● 第三号議案

役員交代について

深澤会長より、交代した地区理事（長野）として、増田秀晃氏が紹介された。

議事終了後、臨席の中山裕一郎氏（教育学部副学部長）より祝辞をいただき、綿内良子幹事の閉会宣言で総会を終了した。

平成21年度信州大学教育学部同窓会一般会計歳入歳出決算書

自 平成21年4月1日
至 平成22年3月31日

歳入合計額 5,787,350円也

歳出合計額 5,393,165円也

差引残額 394,185円也 翌年度へ繰越

〈歳入の部〉

項 目	予 算 額	決 算 額	増・△減	備 考
1 前年度繰越金	726,151	726,151	0	
2 会 費	5,920,000	5,040,000	△ 880,000	252名入金
3 雑 収 入	20,000	21,199	1,199	利子・御祝儀
歳 入 合 計	6,666,151	5,787,350	△ 878,801	

〈歳出の部〉

項 目	予 算 額	決 算 額	増・△減	備 考
1 会 議 費	580,000	419,184	△ 160,816	総会・役員会等
2 事 業 費	1,080,000	1,017,765	△ 62,235	会報・学部後援等
3 事 務 費	2,070,000	1,836,211	△ 233,789	会報発送・印刷等
4 事 務 委 託 費	1,806,000	1,806,000	0	雇用費等
5 雑 費	200,000	224,005	24,005	連合会会費・謝恩会御祝儀等
6 予 備 費	930,151	90,000	△ 840,151	オリンピック出場選手功労金
歳 出 合 計	6,666,151	5,393,165	△ 1,272,986	

教育学部生の活躍

平成十年の教育職員免許法の改正にともない、「教職に関する科目」として「総合演習」が新設されました。「総合演習」は、人権問題や社会福祉の諸問題をはじめ、地球環境や異文化理解に関する問題など、国際社会に共通するテーマや、地域の特色や生活圏の実態に応じたテーマについて、自ら課題を考え、研究計画を立てて探究的に学ぶプロセスを体験することによって、小・中・高等学校の「総合的な学習の時間」に関わる指導力量を養うことをねらいとしています。信州大学教育学部では、独自のカリキュラムをつくり、教員有志(Aタイプ)と学生有志(Bタイプ)が共に探究テーマを設定し、「探究してみたいこと」を自由な発想で総合的に学ぶ授業を展開してきました。

平成二十一年の教育職員免許法施行規則の改正により「教職実践演習」が新設されることとなり、必修科目としての「総合演習」は、平成二十三年度をもって最後となりますが、これまでに意欲あふれる学生たちによるすばらしい活動がたくさん行われてきました。

その中から、平成二十二年度の学生有志(Bタイプ)のグループの活動を紹介します。

フロアホッケーで広げよう！ スペシャルな世界を！

このグループは、知的発達障害のある人のスポーツ活動を行なうスペシャルオリンピックス(以下SO)の学習やその競技の一つであるフロアホッケーの実践を通して障害とは何か、障害者のスポーツとは何か、また、ノーマライゼーションやインクルージョンとは何かなどを理解することを目的として、十三名で活動してきました。まず、フロアホッケー連盟からインストラクターの方をお招きして実技講習を受けました。その後は自分たちで練習を重ね、長野地区のチームが集まる交流戦や全日本フロアホッケー競技大会に参加しました。また、SO長野・松本の代表の中村さんと

いう方をお招きして、SOや知的発達障害、ボランティアについての講義をして頂き、実際にいくつかの大会やSOの日常プログラムにボランティアとして参加しました。後半には自分たちが教師という立場になった時どのような授業をつくっていくかということを考え、附属特別支援学校で実技指導をしたり、鉢盛中学校でボランティアについてのプレゼンテーションを行ったりもしました。一年間を通して体験的な学習が多い活動となりました。

代表 地域スポーツ専攻4年 白田 綾香



「自分が経験した活動の素晴らしさをみんなにも知ってもらいたい」これがBタイプでコースを立ち上げた一番の理由でした。賛同してくれる仲間を誘い、このコースを立ち上げたときはこんなになくさんの活動が得て素晴らしい経験をする事ができました。

わたしたちはこの授業を通してたくさんの人と出会うことができました。そしてフロアホッケーという競技を通して、障害の有無や年齢など関係なしにみんな仲間になることができました。また、わたしたちは「障害」に対する知識や理解を深めることができました。無知は差別が育つ温床であり、知ること、何よりも大事であることを学びました。これらの「出会い」と「学び」という糧は近い将来、わたしたちが社会に出て「先生」と呼ばれる立場になったとき、必ず大きな力になるでしょう。仲間とともに作り上げたこの授業は学生生活で一番の宝です。わたしたちはこれからも「スペシャルな世界」を広げていくために努力し続けたいと思います。



地域活性化のための映画上映会

映画の撮影・上映による地域の活性化を目的として、学生八名により一年間の活動を行いました。学生には、自由に使える時間がある・客観的視点をもつことができる・非営利的活動が行える・といった特性があります。それらの特性を活かし、学生の立場から地域社会と関わりをもち、働きかけていくことができるのではと考え、「長野マチスキプロジェクト」という名のもとに映画の撮影及び上映会を行いました。



映画の撮影にあたって中心に据えたテーマは「新発見」です。自分たちがこれまで目を向けてこなかった地域の魅力・或いは疑問点といったものをテーマとして映画を制作する。それらのテーマは自分たちにとつての「新発見」であり、以前からその地域で暮らす人々にとつての「新発見」でもあります。そういった意識の伝達・共有によって、作品を見せる側と鑑賞する側が互いに地域への関心・意識を高めてゆくことで、地域活性を目指しました。

十月に信州大学教育学部で行われる学園祭「まほろば祭」・十二月に行われた市内のイベント「SUPER NEON HALL」における映画予告集の上映会、二月の長野灯明祭の期間中に行われた「もんぜんまち劇場」にて、ギャラリ豆蔵で本編上映会を行いました。

代表 芸術教育専攻4年 羽田 顕佑

「地域の活性化」を目的とした理由は、自分たち学生が地域つまり社会との関わりについて考えることの重要性に依ります。多くの人が親しみやすい映画というツールを用いることに、人と人との関係を作り出す力の可能性を感じた一年間の活動となりました。

映画の撮影を行うにあたり、場所の提供や出演を快く引き受けて下さった地域の方々には大変感謝しています。

通りがかった人達との交流が生まれたことも、私たち学生と地域住民のつながりを生む役割として映画というツールが機能した証だと思えます。また、そのような関係ができることで映画が地域のものになるという感覚をもつことができました。

教育の現場に留まらず、生きる力を養うための総合演習であるならば、目的を据え、手段を考え、行動に移してゆく一連の流れは、学生自身で遂行していく過程に意味があると考えます。一年間の活動の中にそのような学習意義が感じられたことが何よりの収穫であったように感じます。



音楽で心をつなぐ2010

「音楽で心をつなぐ2010」は様々な分野から集まった学生七人によって結成されたグループで、音楽を通してたくさんの人に喜んでもらうこと、普段接することのできない様々な年代の方々と交流することで、人とのつながりを大切に出来るようにすることをねらいとして養護老人ホーム・病院などを訪問し、ミニコンサートを行ってきました。私たちは活動させていただく施設の方と連絡を取り、コンサートの内容・時間・場所などを一から相談して決めていきました。去年の先輩方の活動を参考にしながら、私たち独自の活動も加えていくことで新たな活動にしていきました。「技術も大切だけど、聴いてくれる方々の目を見て楽しそうに歌おう」「一緒に楽しめるような歌、例えば手遊びができるような歌を歌おう」など聴く人のことを考えて演奏をすることにこだわり、多くの議論を重ねました。また、パンフレットや小道具、メッセージカードなどももちろん手作りです。コンサート後にはお礼状を書き、協力していただいた方々への感謝の気持ちを伝え



ました。このような様々な活動の中でそれぞれの学生が得意分野を生かし、個人個人が積極的に取り組みコンサートを作り上げました。

代表 芸術教育専攻4年 楯 沙織



私はこの活動を通して本当に多くのことを経験し、自分たちの力で何かをやり遂げることの素晴らしさを感じることができました。この活動は先輩や先生、施設の方々など多くの方に協力していただき苦労の末に実現できたものだったため、コンサートが終わった後は毎回感動で胸がいっぱいになりました。「私たちの演奏を聞いて喜んでもらいたい」ということが目的だったはずなのに、自分自身が聞いていただいた方々から沢山の感動をもらっていたのだということに気がきました。振り返ってみると、私たちが「音楽で心をつなぐ」を通して学べたことは、決して音楽についてだけではなかったのだと改めて感じます。このグループのリーダーとして積極的に活動に参加できたこと、たくさんの方々に出会い協力していただけたことをとても嬉しく思います。この活動を通して知ることができた人とのつながりの大切さをいつまでも忘れずにいたいのです。

メディアで表現



私たち『メディアで表現』のメンバー十四人は、一年間を通して、「+sunagi」(ツナグ)というフリーペーパーを発行してきました。テーマは「長野×人」を目指したものは、「長野と人と人をつなぐフリーペーパー」です。「+sunagi」という名前の中には、「+」(プラス)U「you」(あなた)「つ」つまり、これを手に取った「あなたも」、このつながりの一員です、という意味がこめられています。紙を媒体にしたのは、様々な年代の「あなた」に気軽に手に取って頂きたいという理由からです。

私たち大学生は、普段の生活の中で地域の方との関わりがほとんどありません。学校の外の世界に触れなくても、

充実した学生生活が送れてしまいます。しかしせっかく長野に住んでいるのだから、長野という地域にもっと関わりたいという思いがあり、そこからこの活動を始めました。

紙面の内容は、長野×人と長野×∞(無限大)の二つの企画です。長野×人は、長野で活躍されている方のインタビューとその直筆の履歴書を掲載します。そのとき取材に行った方の紹介で、リレー形式で次の取材先を決定していきます。長野×∞は、のの部分に毎号違う言葉が入ります。長野にまつわることやものにスポットを当て、紹介しました。

インターネット検索では調べられないことを知りたい、紹介したいという考えから、どちらも、実際に現場に行くことを大切にしました。フリーペーパーの発行までには、企画、取材、編集などの段階がありますが、その中で最も印象深かったのは取材の部分でした。実際にお話をうかがったり、お仕事を体験させて頂いたりして、そこから肌で感じ取るものが多かったのです。様々な生き方、考え方に触れ、メンバーそれぞれが、進路や自分自身と向き合う貴重な機会となりました。

受け取ったものを長野にたくさん還元するつもりが、振り返ってみると、私たちが得たものの方が多い一年間でした。自分たちで考えること、行動に移すこと、人と話すこと、それを自分の中で消化すること、それを文章にして表現することなどを通して、メンバー一人ひとりが成長できたと思います。この経験を糧に、それぞれの進路で、精進していきたいと思います。

教育実践科学専攻4年/伊藤季里子・三森 ありす
言語教育専攻4年/内堀 万里恵 太谷 春花・小林 隆史
社会科学教育専攻4年/太田 香子 中村 静香・東 星吾
生活科学教育専攻4年/志村 友紀 富田 充・丸山 理恵・宮坂 克也
障害児教育専攻4年/福田 朱里
地域スポーツ専攻4年/酒井 拓也



同窓会情報

教育学部同窓会・研究補助事業について

本号でも、平成十五年度より実施しております同窓会研究補助事業についてお知らせいたします。

本事業の主旨は、①日々の教育研究、教育実践を大切に、自らの授業改善に努めること、②専門職としての教師自らの教育研究・教育実践を磨くこと、③教育の振興・改善についての情報を共有していくことに置かれています。対象者は教育学部同窓会員（同窓会費納入者）で、応募者一律に一万円を補助しています。

応募希望者は所定の様式（「研究補助願及び研究概要」）にしたがって、同窓会事務局（〒三八〇一八五四四 長野市西長野六〇）にお申し込み下さい。当該年度の十一月末日を応募締め切りとしています。応募規定などの詳細な内容は、同窓会ホームページをご覧ください。なお、お申し込みの際には必ず事務局までお問い合わせ下さい（研究補助は十名までとなっております、受付可能かどうかの確認のためです）。

平成二十二年度助成交付の研究テーマ

- ① 村松勝祝（信濃町立野尻湖小学校）
「家庭・地域に信頼される学校は、教職員の地域研修から」
- ② 眞島紀章（信州大学教育学部附属特別支援学校）
「地域の方とかかわりながら活動する生活単元学習の在り方」

- ③ 中島洋（辰野町立辰野南小学校）
「自己の数理を表現し、友と関わりながら、数学的な考えを深めていく算数学習はどうあったらよいか」
- ④ 秋山昇（大桑村立大桑中学校）
「子どもの意識に即して、問題解決的に展開する『道徳の時間』」
- ⑤ 掛川由加子（中野市立科野小学校）
「子どもが生き生きと音楽表現するための指導・支援のあり方」
- ⑥ 和田幸恵（上田市立第三中学校）
「生徒一人ひとりが主体的に学習に取り組み確かな学力向上を目指す指導」数学のよさや楽しさを感じる情報交換のあり方」
- ⑦ 熊谷哲郎（長野市立西条小学校）
「二人一人の子どもが課題解決に向けての見通しを持ち、意欲的に追究していくための指導は、どうあったらよいか（算数科）」
- ⑧ 田中眞二（長野市立松代中学校）
「明日も早く行きたい学校づくり」プロジェクト推進による不登校への効果について」
- ⑨ 島田一裕（長野市立松ヶ丘小学校）
「見通しをもち筋道を立てて考え友と関わり合いながら数理を豊かにする算数学習のあり方」

以上が、平成二十二年度における補助金交付者及び研究テーマに関する一覧です。これらを大いに参考にしていただき、積極的に応募していただきますよう、よろしくお願いいたします。



「明日も早く行きたい学校づくり」プロジェクト推進による不登校への効果について

長野市立松代中学校 田中 眞二

すべての子どもにとって、「明日も早く行きたい」学校をつくるのが、教師としてのライフワークであるとの学校長の考えから、「授業づくり」「学級づくり」「環境づくり」を三本柱として全職員で「明日も早く行きたい学校づくり」プロジェクトを推進して三年を終わろうとしている。この取り組みは不登校対策として始めたプロジェクトではなかったが、平成二十年度は二十六名（四・六％）であった不登校生徒が、平成二十一年には十八名（三・三％）となり、二十二年度末には八名（一・六％）となった。また、昨年まで中間教室に通室していた生徒が、校内の相談室にほぼ毎日登校できるなどの成果も出ている。今まで、不登校対策という対症療法的なものが中心であった。しかし、本プロジェクトを始めるようになり、不登校になった生徒への直接的な支援も大切であるが、不登校を起こさないようにする予防的な対策がより重要であり、そのことは取りも直さず、生徒が「明日も早く行きたい」と思える学校を作ることであると実践してみてわかった。そして、その根底には、生徒は意識はしていなくても友達や先生との絆を強く求めており、その絆づくりを学校生活の様々な活動を通して大切に育むことで、生徒と生徒、教師と生徒との「明日も早く学校に行きたい関係づくり」が構築され、生徒が学校に行く大きな原動力になると考えた。



就職部長 岡田 匡史

さて、平成二十二年度学部卒業生と大学院教育学研究科修了生の進路状況を下表に示しました。学部卒業生二八三名の内訳は、教員一六六名、会社員三十七名、公務員二十三名、進学三十三名、その他二十四名です。そして、教員一六六名の内訳は、正規採用八十八名、非正規採用(臨採)八十六名となり、前年度と比べ、正規採用が三名増、非正規採用が二十四名減となりました。教員一六六名が卒業生全体に占める割合は、五十八・七%でした(前年度は六十二・九%)。

右記二回の模擬面接の他、本番に備え、正規採用者の体験談で構成する教採のためのガイダンス(十二月)を開催し、模擬筆記試験も複数回実施し、年度初めに教員採用試験ガイダンスも行っております。

仲間と最善を尽くし、ゴールを目指し、皆合格！を目標に、就職部会では、正規採用者を一名でも多く出すべく努力し続けます。同窓会の皆様には、引き続き一層のご支援をお願い申し上げます。

[illegible]

就 職 率(学 部)(進学者を除く)	91.498%
教員就職率(学 部)(進学者を除く)	67.206%
教員養成課程卒業者に対する教員就職率	68.421%

信州大学教育学部同窓会

第二十四回通常総会(通知)

日時

平成23年8月11日(木)
午前10時より

会場

長野市岡田町
「ホテル信濃路」

次第

1. 開会宣言
2. 会長挨拶
3. 議長団選任
4. 議事録署名人の選任
並びに書記の任命
5. 議事
第一号議案 平成22年度事業報告及び歳入・歳出決算報告について
第二号議案 平成23年度事業計画(案)及び歳入・歳出予算(案)の承認について
第三号議案 役員の改選
新役員の推薦と委嘱について
6. 来賓紹介、代表挨拶
7. 表彰
8. 閉会宣言

記念講演会: 12時より

講師/佐野 昌男氏

祝賀懇親会: 13時より

記念講演のご案内 (一般公開)

オーストリア/酪農地帯の自然環境と
鳥類の生息状況について

佐野 昌男



私は、信州大学教育学部の鳥類生態学者である羽田健三先生の教室で学びました。

卒業後は、スズメの生態を中心に鳥の研究を進めてきました。退職後は国内外でバードウォッチングの旅を楽しんだり、ボランティア活動の一環で自然観察会を催しています。また、鬼無里・奥裾花自然園を中心とした鬼無里の地域起しにも協力しています。そのような中、昨年9月初旬、オーストリア南部・酪農地帯の小さな村に11日間滞在する機会を得ました。この村は、アルプス山脈の北側の山麓に広がる牧草地帯で、素晴らしい景観を見せています。

村内唯一の集落は、石造りの鐘楼をもつ教会を中心に役場や学校、商店やレストラン、少しばかりの民家などがあります。

酪農を営む農家は、広大な緑の絨毯の中に点在しています。その向こうには、万年雪を頂く峰々が連なっています。牧草地にむかない斜面には、ドイツトウヒの林が見られます。

この美しい景観を求め、オーストリア国内はもとより、ドイツやチェコなど海外からの観光客が訪れます。

私はある一軒の農家に10泊しました。村に着いたのが夜8時頃でしたが、翌朝まわりの景色を見て、その美しさ、スケールの大きさに圧倒されました。ところが、4〜5日過ぎた頃から、鳥の生息種類数や個体数が極端に少ないことに気づきました。すなわち、滞在中、アフリカやスペイン方面へ渡っていく夏鳥を除いた留鳥が、わずか14種類に過ぎませんでした。不思議なことに、この村にはイエスズメは認められても、スズメが全く観察できなかったことです。

一方、私が頻りに訪れているこの時期の鬼無里地域の種類数は、28種類にも達しています。

大勢の人々を魅きつけてきたこの村の美しい景観ですが、村の単純な自然環境、生物多様性の貧弱さを鳥という窓口から見えてきました。

【経歴】

昭和14年 6月11日生まれ
昭和37年 信州大教育学部卒業後、下県義務教育校に在職

平成12年 篠ノ井西中を最後に退職

昭和37年 日本鳥学会・日本野鳥の会入会

平成13年 スハマ会(自然観察グループ)会長

平成15年 鬼無里ブナの森を育てる会副会長

平成18年 長野市環境審議会委員

平成20年 中部森林管理局国有林アドバイザー

【受賞】

昭和48年 日本鳥学会奨学賞
平成13年 日本鳥類保護連盟会長賞

【著書等】

- 昭和48年 「スズメの個体群の行動圏構造」(山階鳥類研究所報)
- 昭和49年 「雪国のスズメ」(誠文堂新光社)
- 昭和54年 「北海道の繁殖期中のスズメの個体群密度」(山階鳥研報)
- 昭和58年 「北海道の冬期のスズメの個体群密度」(山階鳥研報)
- 昭和63年 「人里の野鳥・スズメ」(信濃毎日新聞社)
- 平成2年 「北海道利尻島におけるイエスズメの生息確認」(日本鳥学会誌)
- 平成14年 「三宅島の噴火とスズメ」(エコソフィア10月号 昭和堂)
- 平成17年 「わたしのスズメ研究」(さくらえ書房)
- 平成21年 「亜種化する台湾蘭嶼島のスズメ」(信州理研第10次台湾自然観察の旅報告書)

記念講演終了後、「ホテル信濃路」において祝賀懇親会を費四、〇〇〇円を開催します。

こちらへも多数ご参加くださいますようお願い申し上げます。申し込みは同封の葉書で事務局までお願いいたします。

事務局便り

○研究補助受付中

研究補助申請を四月より受け付けております。詳細は同窓会ホームページをご覧ください。

また、本号の六ページ・同窓会情報の欄をご参照ください。昨年度の助成交付の研究テーマなどが掲載されております。

○住所変更をお忘れなく

転居の際には住所変更の届を事務局宛てにお願い致します。メールでも結構です。

○会費の二重払いについて

同窓会費の二重払いに注意してください。同窓会費は終身会費です。未納者には、後日、納入願いの書面が届きます。二重払いの場合にはお返しますが、振り込み手数料等がかかりますので全額返金できません。

事務局連絡先

電話 026-238-4370
月・水・金 9:30~16:30
http://taedu.shinshu-u.ac.jp
Email:kdousou@shinshu-u.ac.jp